

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 20 No. 1

(通巻70号)

平成5年6月1日発行

編集・発行人 白石竹雄

〒260

千葉市中央区中央港1丁目10番1号

☎043-242-8311(代表)



ジョルジョ・デ・キリコ

「ヘクトールとアンドロマケ」

油彩・キャンバス 一九二四年

(特別展「デ・キリコ展」出品)

この作品は古代ギリシャの詩人ホメロスが作者とされる叙事詩「イリアス」にちなんだ作品です。

トロイア戦争に出陣する英雄ヘクトールと妻アンドロマケが別れを惜しんでいる場面を、重苦しい空の下に神秘的な二体のマネキン人形として画面いっぱい描いています。その不安と緊迫した雰囲気は左奥の馬と戦士によってかもし出し、さらに、画面右手の塔によって謎めいた情感を漂わせています。

キリコは「謎こそ人生で愛するに足る唯一のもの」というニーチェゆずりの信条によって、神秘的で謎めいた独自の世界を確立するため、この人間でも人工物でもない、マネキン人形を好んで描きました。しかし、一九一九年にティツィアーノの絵を見ていた時「突然偉大な絵画は何であるかを啓示された」とし、古典絵画の研究を始めました。この作品はキリコが確立した独自の世界と伝統的なマチエールをあわせ、新しい芸術を生み出そうとした、キリコの記念碑的な作品です。

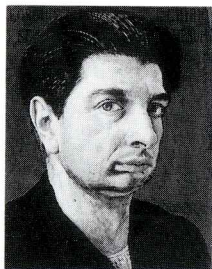
(三浦 拓郎)

県民の日
記念事業

特
別
展

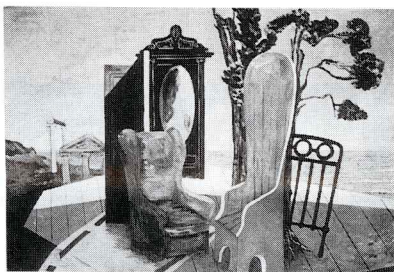
デ
・
キ
リ
コ
展

'93・6・5(土)～7・11(日)



「自画像」1920

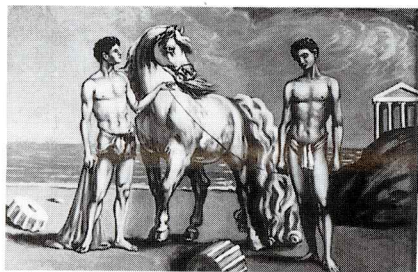
今世紀イタリアを代表する画家ジョルジョ・デ・キリコ(Giorgio de Chirico 一八八八―一九七八)は、イタリア人を両親として、ギリシャのヴォロスで生まれました。アテネで絵を学び、父の死後はミュンヘンに移り絵の勉強を続けるうちに、ドイツロマン派の画家アーノルド・ベックリンの幻想的な作品に魅かれ影響を受け、ベックリンの様式にならって油絵を描きました。また哲学者ニーチェにも傾倒し、一九一一年のイタリア滞在の際には、ニーチェ



「海辺の家具」1927頃

エがイタリアの町から感じ取った「秋の午後の限りなく孤独な詩情」を絵画で表現すべく、「イタリア広場」の連作に入り、時間の静止したようなひとけのない広場、不自然に長い影を引く彫像、異常な遠近法といった、キリコ独自の神秘的な雰囲気が漂う作品を作り出しました。これらの作品をパリで発表

したキリコは、ピカソや詩人アポリネールらの知遇を得、名声を確立し、また関連のない事物を組み合わせる彼の手法は、後のシュールレアリスム絵画の発展に大きな影響を与えました。一九一五年、前年勃発した第一次世界大戦に応召しイタリアに戻り、フエラーラで兵役につきました。その後ローマに配属換えとなり、ローマの美術館で見た古典絵画から強い啓示を受け、その研究に取り組みました。さらに積極的に個展や執筆活動を行い、当時のイタリアにおいて中心的な作家として活躍しました。一九二五年、再びパリに戻り、シュールレアリスムの画家たちから偉大な先駆者として迎えられました。しかしキリコはイタリアにいたるあいだに、過去の伝統的な絵画の技法を取り入れるなど、新たな



「ディオスクロイ」1934頃

世界をつくりだそうと模索していたため以前のキリコの作品しか認めようとしないうるシュールレアリスト達とは相容れず、キリコは彼らから「シュールレアリスムの先駆者にして裏切者」という評価を受け、決別しました。ところがキリコ自身は、以前の作風も捨てず、それにのつとつた作品も描き続けまし



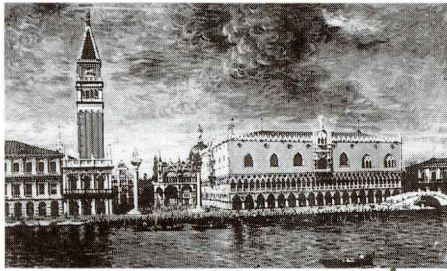
「甲冑をつけた自画像」1948

た。このため同じ作家が描いたものとは思えない作品が、同時に生み出されることになりました。キリコが「謎の画家」と呼ばれる所以です。

◆展覧会の内容について

かつてキリコを絶賛したシュールレアリスムの芸術家たちは、一九二〇年以降の、キリコの古典回帰を批判し、それ以前の作品しか評価しない態度をとりましたが、この評価は大きな影響力を持ち、以後、キリコの芸術を理解する上で、一つの基準となっています。

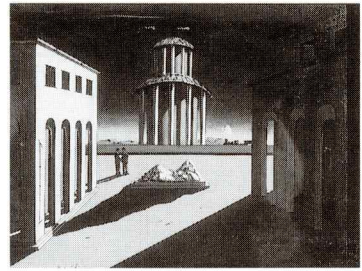
今回の特別展では、キリコが古典絵画の美に魅せられ、新たな作風の構築に向かう、一九二〇年代以降の活動に焦点を当て、二〇一五〇年代までの油彩作品を中心に、版画、



「ヴェネツィア・総督宮殿」1950



「岩のある風景と静物」1954頃



「イタリア広場」1950頃

彫刻を含む約一〇〇点を展示し、彼が新たに展開した世界の再評価を試みるものです。
まず油彩では、一九二〇年代、三〇年代、四〇年代の三つの年代に分け、二〇年代ではこの頃キリコが研究したテ

ンペラの技法による作品等、三〇年代では、彼が度々モチーフにした海辺に立つ馬や、古代の建築物を描いた作品等、四〇年代では、空と大地を背景に、力強い筆触で人物や静物を描いた作品、キリコの名声を高めた二〇年代以前のモチーフを題材にした作品などを紹介します。また彫刻では、キリコの絵の世界をそのまま立体にしたような独特な形態の作品を、さらに油彩にはない軽やかな雰囲気の数画作品を紹介します。

本展では、日本初公開の作品を多数展示します。この機会にぜひ御鑑賞ください。

(中 松 彰 久)

★開館時間

午前9時～午後四時三〇分
(入場は四時まで)

月曜日休館

★観覧料

一般五〇〇円(三〇〇円)
高・大学生三〇〇円(二〇〇円)、小・中学生二〇〇円(七〇円) (内は二〇名以上の団体料金)
六月十五日の県民の日は無料

❖美術講演会❖

本年度は、各展覧会に併せて美術講演会を五回実施する予定です。

第一回美術講演会は、六月五日(土)から開催する特別展「デ・キリコ展」に伴い実施します。

ぜひ多くの方々に御参加いただき、キリコの芸術についてより一層の興味と理解を深める機会としていただければと思います。

日時 七月三日(土)午後二時
演題 「デ・キリコの謎」

講師 井関正昭氏(北海道立近代美術館長)

※会場は本館講堂で参加者数は二〇〇人を対象としています。聴講料は無料で当日先着順です。

常設収蔵作品展

本年度第一期(四月一日～七月十一日)は前期(一〇%)と後期(一〇%)に分け、前期では、「新収蔵作品」と「房総と近代美術」の二つのテーマで行いました。

「新収蔵作品」では、新たに収蔵した、岸田劉生、浅井忠、宮之原謙、山室百世、浜口陽三などの作品を展示しました。「房総と近代美術」では、房総の近・現代美術の発展に尽力した洋画家たちに焦点をあて紹介しました。

後期は「房総と近代美術」のみとなりますが、房総の代表的な物故した書家たちの作品を展示します。線の表現である書は、筆運びに速度、リズムがあり、また墨の濃淡による様々な表現があります。書家たちの研ぎ澄まされた線が繰り広げる芸術性豊かな書の世界を紹介します。主な出品作家及び作品としては、県書道界の発展に大きな足跡を残した、浅見喜舟の「煙籠」や「太公有意垂釣」をはじめ、我が国を代表する篆刻の巨匠、石井雙石の「林鳥相忘不避人」、鈴木方鶴のオリベッティ国際

賞受賞作である「一笑千山青」、高澤南総の「藝に遊ぶ」など八作家の作品、二十一点を展示します。

第二期(七月十七日～十月十一日)では前期(一〇%)に「海・湖・川のある風景」のモチーフに焦点をあてた作品の展示を、「房総と近代美術」では、彫刻作品を紹介しました。また後期(一〇%)では「房総と近代美術」のみの展示となり、本館の代表的な作品や、日頃から鑑賞の要望の高い作品を展示します。

第三期(十二月四日～三月二十七日)では、前期(一〇%)・中期(一〇%)・後期(一〇%)を通して「房総と近代美術」として金工に焦点をあて展示します。さらに、中期・後期においては「女性の表現」として女性をモチーフとした作品を、後期においては「房総と近代美術」で日頃から鑑賞の要望の高い作品も併せて展示します。



浅見喜舟「煙籠」

展覧会案内

▼特別展

ミレーと浅井忠の出会い
バルビゾン派と日本

ミレー、コローに代表されるバルビゾン派の作品は、明治九年に工部美術学校の教授として来日したイタリアの風景画家、フォンタネージによって紹介されました。その後、展覧会や画集等を通じて様々な形で紹介されたバルビゾン派の芸術は美術界はもとより文学、思想など多方面に影響を及ぼしました。

本展では、「日本に将来されたバルビゾン派作品」「バルビゾン派受容に関わる日本洋画の作品」をテーマに、バルビゾン派の作品と、浅井忠、黒田清輝などの日本洋画家の作品を展覧し、バルビゾン派とわが国近代洋画との結びつきを浮き彫りにします。

なお、今回の展覧会は、山梨県立美術館、福島県立美術館、千葉県立美術館の三館合同の企画により実施されるものです。

(会期) 九月四日(土)～

十月十一日(月)

▼房総の美術家シリーズ② 秋山逸生展

工芸家秋山逸生(一九〇一～一九八八)は、東京に生まれ、大正期から市川市に居住し、昭和四十五年「芝山象嵌」の技法が千葉県無形文化財に指定され、六十二年には「木象嵌」の技法で国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。

本展覧会では、逸生の作品約五十点を展覧し、その芸術を回顧します。

(会期) 十一月二十日(土)～
十二月二十四日(金)

▼第十七回 千葉県移動美術館

優れた美術作品を、より多くの方々に鑑賞していただくため、県内二会場を巡回する展覧会を開催します。日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の各分野の作品を本館の収蔵作品を中心に展示します。

今年度の会場と会期は次のとおりです。

◎睦生ゆうあい館(長生郡)
十一月十七日(水)～
十一月三十日(火)
◎山田町公民館(香取郡)
十二月三日(金)～
十二月十六日(木)

新収蔵作品紹介

平成四年九月一日から平成五年五月三十一日までに収蔵された作品を紹介いたします。

購入

「日本画」

浅井 忠作

「農耕の図(着彩・二〇〇丁七頃)」

田村宗立作

「白衣観音」(墨・淡彩・二九〇)

「洋画」

麻生蓉子作

「出を待つ」(油彩・一九六)

椿 貞雄作

「夏の風景」(油彩・一九六)

伊藤順一 作

「里」(アクリル・一九九)

畠中陽一 作

「アルミネーション―光の誘惑」(アクリル・一九九)

近藤南海子 作

「グレーの冬」(アクリル・一九九)

王 軍作

「蘇州水郷」(油彩・一九九)

行本正義 作

「コンポジションB」(油彩・一九五)

石井光楓 作

「タコマ」(水彩・一九五)

「アープル市・場末」(水彩)

「荷揚げ」(水彩)

櫻田精一 作

「白い舟」(油彩・一九五)



三谷十糸子「魚紋」

ラヴィエ 作

「モレステル風景」(油彩)

「モレステル風景」(油彩)

「たそがれ」(水彩・八八五)

「彫刻」

長谷川昂 作

「朝」(木彫・一九九)

「工芸」

横山朝陽 作

「草花文搔落花瓶」(陶芸)

川上祥三郎 作

「黄釉彫文花瓶」(陶芸・一九六)

宮之原謙 作

「彩地盛蓮葉文壺」(陶芸・一九五)

浅井 忠 作

「草花盆」(桔梗文花瓶)「インカ文湯呑」(いずれも一九〇七頃)

「書」

高澤南総 作

「春風秋月」(一九一)

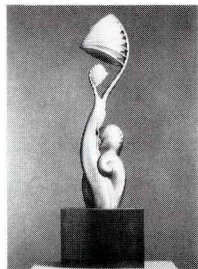
「版画」

深沢幸雄 作

「刻印」(一九六) 他二十三点

寄贈

次の作品を寄贈いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。



山室百世「鑄銅萌ゆる力置物」

【日本画】

三谷青子氏より
三谷十糸子作

【魚紋】 (一九六)

【洋画】

飯田祐三氏より
チャールズ・ワグマン作

「七里ヶ浜風景」(油彩)

藤井外喜雄氏より

藤井外喜雄作

「シャルトル」(油彩) 他一点

飯島賢治氏より

石井光楓作

「ブルタニユーにて」(油彩・一九三)

行木正義氏より

行木正義作

「作品G」(一九五) 他三点

佐善アキ氏より

佐善明作

「ソフィステイケートな出会い」(一九七) 他四点

櫻田精一氏より

櫻田精一作

【追憶】 (油彩・一九四)

【工芸】

山室和子氏より
山室百世作

「鑄銅草花置物」(鑄金) 他十五点

川村幹也・佐藤雅子氏より

河村蛸山作

「長方皿 雨・風・晴」(陶芸)

横山光ノ介氏より

横山朝陽作

「草花紋搔落皿」(陶芸) 他七点

「書」

小川栄次郎氏より

小川瓦木作

「叙情」(一九五) 他二点

高澤雅枝氏より

高澤南総作

「藝に遊ぶ」(一九九) 他二点

【日本画】

「保管換」

「登龍門」(絹本)

「洋画」

浅井忠作

「房州白浜」(鉛筆・一八八)

【工芸】

秋山逸生作

「蝶貝象嵌小箱」(木工)

【版画】

川瀬巴水作

「房州大海」(一九五) 他一点

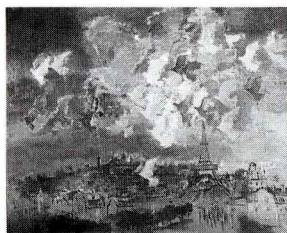
【研究資料】

浅井忠作「流鏑馬」(水彩)

美の扉

千葉県立美術館に収蔵されることになった「追憶」と「白い舟」について。

「追憶」の作品は元祐年に描いたものである。私が初めてパリに行ったのは元長年で一年程の滞在で、其の間フランス、イタリア、スペイン、ドイツ、イギリス、スイスなどヨーロッパの美術館を中心に名画を尋ねて廻る旅であったが、初めて生の作品から受けた感動にはそれまでの知識が如何に表面だけのものではあつたか、思い知らされるのであつた。絵画の持つ力には魂が、内面が強靱に表現されなければならぬと思われた。描くことはそれは表現することなので、対象には客観的に普遍的に描くものがあるのではなくて自分の内なる美により対象に美



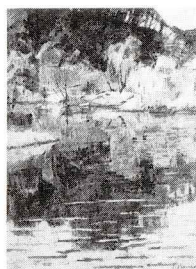
「追憶」1974

幻の舟 櫻田 精一

が見えてくるのである。印象派の画家達の絵で同じ風景、場所を複数の人が描いているが、表現はそれぞれ違っていて、受けるインパクトは変わらぬ。グループで写生に行ったりモデルを描いたりすると直ぐ描ける人と描けない人がある。対象に美が把握できないからだろう。対象の美は内なる美、それは己にあるのだから向うからは美だと誘いかけてはくれない。表現するのは対象とぶつかって火花が散るように感動しなければ描けないものである。制作に行き詰まったり、迷ったり、感動しなくなったりした時には優れた作品を見直すことによって、発見や刺激や感動が蘇ってくる。よく旅に行ったり外国に行くのは常に感受性を曇らせないためである。

「追憶」の作品はそうした夢と希望を抱いて仲間と共にフランスに向う内なる心を表現しようとして描いた。既にパリの空を翔び、遙か下にはモンマルトルの丘が見え、エッフェル塔が聳えて芸術と歴史を秘めたパリの街が広がっている。ここに描かれた街景のそ

れぞれは実景のものとは違っている。この作品は全く同一の構図でもう一枚描いている。別のものでは飛翔している馬の頸が後ろを振り向いた形にした。これは仲間を気遣う内面の気持ちを表現して画面にムーブマンを持たせてみた。「白い舟」は利根川沿いの沼を描いた。ここは野田の対岸茨城県にある沼のある広大な湿原である。この沼を開発して街の活性化にしようとする勢力と、自然保護の風致区にして開発から守ろうとする勢力とが拮抗している。近年、この沼に白鳥が渡来して、遠くから見物の人が来ている。春の息吹きが聴えるようになった頃、沼に出掛けてみたら小さな白い舟が岸辺に繋がれていた。都会から移ってきた少年の舟であろうか。後ろの土手の陰では開発のブルドーザーが高い音を立てていた。



「白い舟」1985

(目展参事)

ごあんない 実技講座 (6月以降)

【美術館実技講座】

◆洋画講座 (1)

経験者を対象に、人物、静物などをモチーフに、水彩画の技法やさまざまな表現方法について学習します。

会期 7月23・24・25・28・29・30・31・

8月3・4・5日

講師 戸田健夫氏

定員 30名

締切 7月9日 (金)

◆彫刻講座

経験者を対象に、木を素材として、用具の取り扱い方をはじめ、立体作品の制作方法を学習します。



彫刻講座

会期 10月19・20・21・22・23・24・26・27・29・30・31・

11月2日

講師 渋谷三朗氏

定員 15名

締切 10月5日 (火)

◆陶芸講座 (2)

経験者を対象に、用具の取り扱い方、釉薬の調合、焼成の方法などを、茶碗、花器などの制作を通して学習します。

会期 11月9・10・11・12・13・

12月3・8・16日

講師 神谷紀雄氏

定員 30名

締切 10月26日 (火)

◆洋画講座 (2)

経験者を対象に、人物、静物をモチーフに、油彩画の技法やさまざまな表現方法について学習します。

会期 11月11・12・17・18・19・20・21・23・24・25日

講師 松沢茂雄氏

定員 30名

締切 10月28日 (木)

◆書芸講座

経験者を対象に、書の歴史をはじめ、漢字の臨書を中心に学習します。

会期 11月30・12月1・2日

講師 中村象閣氏

定員 25名

締切 11月16日 (火)

◆金工講座

経験者を対象に、銅板レリフの技法で鍛金の基礎を学習します。

会期 1月25・26・27・28・29・

2月1・2・3・5・

6・8・9日

講師 小林正利氏

定員 15名

締切 1月11日 (火)

《申し込み方法》

往復はがきに希望講座名、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、美術館普及課までお申し込みください。
なお、定員を越えた場合には抽選となりますのでご了承ください。

情報資料室だより

●寄贈図書・図録の御紹介

美術評論家の中村傳三郎氏から平成三年度に続き、昨年度も図書44冊、図録35冊、雑誌類61冊、その他の貴重な資料を頂きました。主なものは次のとおりです。

図書 「田村孝之介画集」
「清水多嘉示作品集」 「平櫛田中彫琢大成」 「岡鹿之助画集」 「富永直樹」 「個の創意」 図録 「鹿子木孟郎展」 「安井曾太郎展」 「ジャコモ・マンズー追悼展」 「後藤清一彫刻展」 「富岡鉄斎」 ほか

国内外で活躍されている彫刻家の木村賢太郎氏から図録212冊を頂きました。主なものは次のとおりです。
「ピラネージ版画展」 「マチス展」 「ジャコメッティ展」 「ギリシャ現代美術展」 「ヘンリー・ムーアによるヘンリー・ムーア展」 ほか

御協力頂きました御二人に厚くお礼申しあげます。
●特別展開連図書の御紹介
情報資料室では「デ・キリコ展」に関連する次の図書を備えています。御利用ください。「デ・キリコ 現代世界

の美術17」 「シュールレアリスムという伝説」 「シュールレアリスム宣言」 「絵画の発見17 キリコ／タリ」 「シュールレアリスムの展開」 「シュールレアリスムの思想」 「シュールレアリスムの資料」 ほか

職員異動

平成四年度末人事異動により、次の職員が替りました。

◆退職者

福田 誠 (館長)

加藤 貞美治 (庶務課主査)

◆転入者

白石 竹雄 (文化課長→館長)

〈交通案内〉

- JR総武線「千葉駅」より「千葉ポートタワー」一行バス15分「美術館・郵便局前」下車徒歩1分
- JR京葉線「千葉みなと」駅下車徒歩8分

